



A TREASURY OF WORLD LITERATURE

新集

# 世界の文学

36

曼ハッタ乗換駅

西田 実訳

あらゆる国々にて

西田 実 大橋健三郎訳

中央公論社

新集 世界の文学 36

©1969

ドス・バソス

訳者 西田 実  
大橋健三郎

昭和44年7月25日初版印刷  
昭和44年8月5日初版発行

発行者 山 越 豊

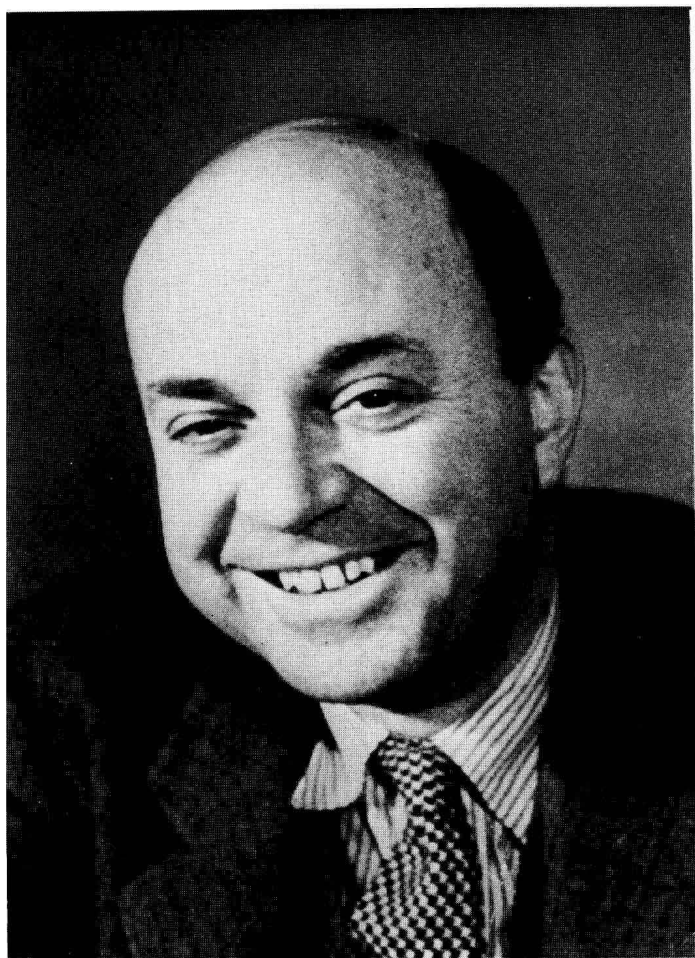
本文整版印刷 三晃印刷株式会社  
扉・函貼印刷 求竜堂印刷株式会社  
口絵印刷 凸版印刷株式会社  
本文用紙 三菱製紙株式会社  
クロス 日本クロス工業株式会社  
函ボール 佐賀板紙株式会社  
製函 加藤製函印刷株式会社  
製本 小泉製本株式会社

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋2丁目1番地  
電話(561)5921(代) 振替東京34



ウェブスター街を走る高架線　光と影のメカニク的なパターンを投げかける高架線は、『マンハッタン乗換駅』当時の交通の花形であった。その一部は今も残って都心と郊外を結ぶ重要な足となっている。



ドス・パソス

目次

マンハッタン乗換駅

3

あらゆる国々にて

367

解説

529

年譜

551



マン  
ハッ  
タン  
乗換  
駅

ニュージャージー州



## 第一部

### 一 渡船場

ひび割れた厚板張りの岸壁の間で、こわれた箱や、オレンジの皮や、腐ったキャベツが浮き沈みする上を、鷗が三羽輪を描く。丸いへさきの下に緑の波を泡だたせながら、連絡船は横滑りに流されてどしんとぶつかり、碎けた波を呑みこみ、なめらかに滑ってゆつくりと船着き場に落ち着く。手巻きウィンチが、がらんがらんと鎖を鳴らして勢よく回る。ゲートが上にたたみこまれると、人々の足が隙間をまたぎ越え、男女の群れが、肥しのおいにする、木のトンネルのような渡船場の建物の中を、まるで落とし穴から圧搾機の中へ放りこまれる林檎のように、もみくちやになり、押しあいへしあいしながら先を争ってゆく。

看護婦は籠を、おまるでも持つように前へ突きだしたまま持って、大きな部屋のドアを開けた。四方の壁に緑がかった塗料を塗った、乾燥した暑い部屋には、アルコールやヨードホルムのおいの混じった空気が垂れこめ

て、壁際に並んだほかの籠から聞こえてくる、かすかな、むずかるような泣き声が、もだえるようにわきあがっていた。看護婦は籠を下におくと、口をすぼめてその中をちよつとのぞきこんだ。生まれたばかりの赤ん坊は、綿のふとんにくるまれて、みみずのかたまりのように弱々しくうごめいていた。

連絡船のデッキで、一人の老人がヴァイオリンを弾いていた。猿のような顔の片端をしかめて、ひび割れたエナメル革の靴の一方の爪先で拍子をとっている。バッド・コーペニングは、川に背を向けて手すりに腰をかけながら、その老人を見つめていた。川風が吹いて、ぎゅっとかぶったへそなし帽からはみでた髪の毛をそよがせ、こめかみの汗をかわかした。足はまめだらけで、体は綿のように疲れていたが、連絡船が川の水を蹴って小さな带状の波をひたひたと立てながら、船着き場を滑りだしたときには、彼は突然体じゅうの血管の中に、何か暖かい、うずくようなものが走るのを感じた。「ねえ、おめえさん、この船が着くところから町ん中までは、どれくらいえあるかね？」と、彼はそばに立っている、青と白の縞ネクタイをして麦わら帽をかぶった若い男にきいた。

若者は、最初はバッドのはきつぶした靴、次には上着のすりきれた袖口から突きでている赤らんだ手首、それ

から筋<sup>すぢ</sup>ばった七面鳥のような喉<sup>のど</sup>のあたりへと視線をうつし、やがて、ひさしの破れた帽子の下からじっと見つめている相手の眼を、氣どった格好でおもむろにのぞきこんだ。

「そりゃ、行きさき次第さ」

「ブロードウェイはどういうふうに行くのかね？……おらあ、中心地へ行きてえんだが」

「東へ一ブロック歩いて、ブロードウェイを下りやあいんだ。どんどん歩いていきや、中心地に出来るさ」  
「ありがとうよ。そうしてみるぜ」

ウェアオリン弾きは、帽子をさしのべて、みすほらしい禿<sup>は</sup>げ頭に残った白髪<sup>しろがみ</sup>の房を風になぶらせながら、人ごみの中を歩きまわっていた。ふと氣がつくと、その顔がバッドを見上げ、二本の黒いピンのようなつづれた両の眼が、彼の眼をのぞきこんでいる。「だめだよ」と、彼はつつけんとんに言うと、顔をそむけて、ナイフの刃のようにきらきら光る広い川面<sup>かわ</sup>に眼をやった。船着き場の厚板張りの岸壁が迫ってきて、連絡船がゆらいでぶつかりと、びしびしと音をたてた。鎖ががらんがらんと鳴り、バッドは人の群れに押されて船着き場の建物を通りぬけた。二台の石炭を積んだ荷馬車の間をぬけると、埃<sup>ちり</sup>っぽい、広い通りを越えて、黄色い市街電車のほうに向かう。膝<sup>ひざ</sup>ががくがく震えた。彼は両手をポケットに深くつつこ

んだ。

次の角まで行く途中に、「食堂」という看板をかけた簡易食堂車がとまっていた。彼はぎこちなく回転椅子の上に腰をすべらせると、長い間値段表を見つめた。

「卵のフライとコーヒー」

「両面焼きにしますか？」カウンターの向こうで、肉づきのいい、そばかすだらけの前腕をエプロンで拭いていた赤毛の男がきいた。バッド・コーペニングは、はっとして坐りなおした。

「え？」

「卵のことさ。両面焼きにしますか、目玉焼きにしますか？」

「ああ、なに、両面焼きにしてくれ」バッドは再びカウンターに前かがみになって、両手で頭をかかえた。

「すっかりまいっていなさるようだね、おまえさん」じゅうじゅう音をたてているフライパンの脂の中へ卵を割りながら、男が言う。

「州の北からやってきたでな。今朝は十五マイルも歩いちゃった」

男は糸切り歯の間をひゅうと鳴らした。「このでっかい町へ仕事探しにつてわけですかね」

バッドはうなずいた。男は、じゅうじゅういっている、こんがり焼けた卵をぼいと皿にあけると、その端にバタ

つきパンを少しのせて、バッドのほうに押しやった。

「おまえさんにちっとばかり教えといてあげるがね。と言ったって、なに、お代は無用ってやつさね。仕事を探しに出かける前に、ひげをあたって、髪を刈って、その服からちっとばかり干草くずを払っておくがいいですぜ。そのほうがうまく仕事にありつけるのもんだ。この町じゃ、見ばってやつがものを言うんだからね」

「おらあ、ちゃんと働けるさ。これでも腕は確かなんだから」バッドは口いっぱいにほおぼりながら、ぶつぶつ言った。

「ただ教えといてあげるだけでさ」赤毛の男は言うど、ストロブのほうに向きなおった。

エド・サッチャーは、病院の大きな玄関の大理石の階段をのぼりながら、がたがた体を震わせていた。薬のにおいが喉にからんだ。とりすました顔の女が、机の向こうから彼のほうを見ていた。彼は声を落着けようとした。

「サッチャーという者ですが、家内のぐあいはどうでしょう？」

「どうぞ上へいらしてください」

「ええ、でも、万事うまくいっているのでしょうか？」

「その階の係の看護婦が何でも承知しております。左の

階段をお上がりになれば、三階が産室です」

エド・サッチャーは緑色のパラフィン紙に包んだ花束をかかえていた。広い階段をよろよろのぼってゆくと、繊維の敷物をおさえている真鍮の棒に爪先がぶつかって、階段がゆれるように思われた。ドアがしまつて、室内の首を締めるような金切り声がとぎれた。彼は一人の看護婦をとめた。

「サッチャーという者ですが、家内に面会したいのです」

「場所をご存じなら、どうぞ」

「でも場所が移ったそうですが」

「廊下のはずれの受付で聞いてください」

彼は冷たい唇を噛んだ。廊下のはずれまで行くと、赤い顔をした女が、にっこり笑って彼のほうを見た。

「ご心配ありませんよ。元気な女の赤ちゃんのお父様におなりで、うれしいでしょう？」

「ええ、はじめての子供だし、スージーはとても弱いものですから」彼は眼をばちばちさせて、どもりながら言った。

「はい、よくわかりますわ。ご心配なもの無理はありません……中へお入りになって、奥様のお目が覚めたらお話しください。赤ちゃんは二時間前に生まれたばかりです。奥様がお疲れにならないように気をつけてください

ね」

エド・サッチャーは小柄な男で、ブロンズのちよびひげを左右に分けて生やし、つやのない灰色の眼をしていた。彼は看護婦の手をつかんでゆすぶりながら、黄色い乱杭歯をすっかりむき出しにして笑った。

「はじめての子供なんですよ」

「おめでとうございます」と看護婦は言った。

陰気くさいガス燈の下に並んだベッド、ごそごそ動く寝具のいやなおい、太った顔、瘦せた顔、黄色い顔、白い顔、あ、あそこにいる。スージーのしなびて歪んだ小さい白い顔に、黄色い髪がゆるく巻きつけてあった。彼は薔薇の包みをほどいて、枕もとのテーブルの上においた。窓から外を見ると、まるで水の底をのぞきこんでいるようだった。広場の木々がからみあって、青い蜘蛛の巣のように見えた。並木道の街燈が順々にともされて、緑色のちらちらした光が、煉瓦色の暗い家々のかたまりを照らし出し、煙突の通風管や水槽が、赤い肌色に染まった空にくっきりと浮き出ていた。彼女の眼の青いまぶたが静かに開いた。

「あなた？ まあ、エドったら、ジャック（薔薇の）じゃないの。むだ使いするわねえ」

「だって仕方ないよ。君が好きだと思ったから」

ベッドの足もとのあたりを一人の看護婦が動きまわっ

ていた。

「すいませんですけど、赤ん坊を見せていただけませんか？」看護婦はうなずいた。顎の長い、血色の悪い女で、口を固くしめていた。

「いやなやつ」とスージーが小声で言った。「見るだけでいらいらするわ、まったく。いじわるったらありやしない、あのオールドミス」

「気にするなよ、一日か二日じゃないか」スージーは眼を閉じた。

「やっぱりエレンで名前にするつもり？」

看護婦が籠を持って来て、スージーの隣のベッドの上に置いた。

「なんてかわいいんだろう。ほら、息をしている……オイルで拭いたんだね」彼は妻に手をかして、片肘をついて体を起こさせた。黄色い髪を巻きつけてあったのがほどけて、彼の手と腕にばらりとこかった。「あんなにいて、見分けがつくんですか？」

「時々わからなくなるんですよ」と看護婦は、口を曲げて無理に笑い顔を作った。その小さな黒ずんだ顔を、スージーは睨みつけるように見つめた。「これほんとにあたしの子でしょうね？」

「だいじょうぶです」

「でも何にもしるしがついてないわ」

「いますぐしるしをつけます」

「でもあたしの子は肌が黒かったわ」スージーは枕の上に体を横たえて、あえぐように息をした。

「奥様の髪とちょうど同じ明るい色の、かわいらしいうぶ毛が生えていますよ」

スージーは両腕を頭の上に突きあげて叫んだ。「あたしのじゃない。あたしのじゃない。持っていて……あの女があたしの赤ん坊を盗ったんだ！」

「きみ、お願いだから。きみ、お願いだから」彼はふと人を彼女のまわりに押しこもうとした。

「困ったわね」看護婦は籠を取り上げながら落ち着きはらって言った。「鎮静剤をあげなければ」

スージーはベッドから上半身を起こして、体をこわばらせた。「持っていて！」と大声で言うのと、彼女はヒステリーをおこしてはったり倒れ、弱々しくうめくように、ひいひいといつまでも泣きつづけた。

「何てこった！」エド・サッチャーは両手を固く握りしめて叫んだ。

「今晚はもうお帰りになったほうがいいでしょう、サッチャーさん……あなたがお帰になれば、おさまりますよ……薔薇は水につけておきます」

最後の階段のところで彼は一人のずんぐりした男に追いついた。男は両手をもみながら、時間をかけてぶらぶ

ら階段を下りていた。二人の視線が合った。

「うまくいっただすか？」とそのずんぐりした男がたずねた。

「ええ、まあ」とサッチャーは元氣のない声で言った。ずんぐりした男は彼のほうを向いて、だみ声に喜びをあふれさせながら言った。「わたしにおめでとうください。わたしにおめでとうください。わたしの妻、男の子産みました」

サッチャーはその太った小さい手を握った。「ぼくのところは女です」と彼は恥ずかしそうに知らせた。

「もう五年になります。毎年女です。こんどはどうとう男の子です」

「ほんとに、一生忘れられませんね」二人で表の通りへ足を運びながら、エド・サッチャーはそう言った。

「ごいっしょに祝杯をあげさせていただきたいですが、いかがですか？」

「それは喜んで」

三番街の角にあるバーの、格子造りの両開き戸がぱたぱたと動いていた。足をそっと引きずるようにして、二人は奥の部屋へ入っていった。

きずだらけの褐色のテーブルに向かって腰をおろすと、このドイツ人は、「ああ、家庭生活は、苦しみ多いです」と言った。

「そうですね。ぼくははじめての子供ですが」

「ビール飲みますか？」

「ええ、ぼくは何でもいいんです」

「クルムバッハーの輸入ビールを二本、わたしたちの子供のため飲みましょう」びんの口がぼんとあいて、セピア色の泡がグラスにあふれた。「おめでとう……乾杯」とドイツ人は言つてグラスをあげた。彼は口ひげの泡を拭きとつて、ピンク色のこぶしでテーブルをこつんと叩いた。「あの、失礼ですが……」

「ぼくの名はサッチャーと申します」

「失礼ですが、サッチャーさん、ご職業をうかがつてよいですか？」

「会計士です。近いうちに公認会計士になりたいと思っています」

「わたしは印刷屋で、わたしの名前はザカー、マーカス・アントニウス・ザカーと申します」

「どうぞよろしく、ザカーさん」

二人はテーブルのビールびんの間で握手した。

「公認会計士、お金をたくさん儲けます」とザカーさんが言った。

「お金たくさん儲けなければならぬのです、生まれた娘のために」

「子供、お金たくさんいます」とザカーさんは太い声

で言葉を続けた。

「一本おごらせてください」サッチャーは、ポケットにいくら持っているか頭の中で計算しながら言った。かわいそうにスージーは、おれがこうしてバーで飲んでゐるのをよくは思ひまい。だがこれ一回だけだ。おれは勉強しているのだ、父親になる勉強をしているのだ。

「喜んで頂きますよ」とザカーさんは言った。「……でも子供は、お金たくさんいます……ただ食べて、着物をすりへらすだけです。商売が順調になりさえしたら……ああ。ところがやれ抵当だとか、お金借りる骨折りとか、やれ賃金値上げだとか、このごろの、例の氣違ひめいた組合の社会主義者だとか、爆弾男とか……」

「さあ健康を祝して、ザカーさん」ザカーさんは両方の手の親指と人差し指で、口ひげの泡をしぼるように取つた。「でもサッチャーさん、毎日男の子生まれるわけではありませんからね」

「女の子だつてですよ、ザカーさん」

新しいびんを持ってきたバーテンはテーブルにこぼれたビールを拭き、赤い手から布巾を垂らしたまま、そばに立つて聞いていた。

「わたしの息子にまた息子ができて乾杯するときには、シャンペンでやるように、そう心の中でわたしは願っています。ええ、この大都會では万事そういうふうになる

です」

「ぼくの娘はおとなしい家庭的な娘になってもらいたい。びらびらした飾りをつけたり、レースで体をきつく締めたりしたこのごろの若い女のようになってもらいたくないな。その時分にはぼくは仕事をやめて、ハドソン川の上流に小さな土地を買って、夕方は庭いじりをするんだ……退職して年に三千ドルの金が入る連中を、下町のほうで何人も知ってますがね。それには金を貯めることです」

「貯めるのはだめだよ」とバーテンが言った。「おれは十年も貯めたが、貯蓄銀行がやられちゃって、すっからかん、残ったのは役にも立たねえ通帳だけさ。確かな筋から聞きこんで、いちかばちか山を張る、これしかないね」

「それじゃ博奕<sup>ばくち</sup>じゃないか」とサッチャーは怒ったように言った。

「そのとおり、博奕ですよ」と言うたバーテンは、二本の空びんを振りながら、カウンターのほうへ戻っていった。

「博奕。あの男はそんなにまちゃがっていません」ザカーさんはそう言つて、考えこむようにどろんとした眼で自分のグラスのビールを見つめた。「野心のある人間は、博奕を打たなければいけません。わたしは十二歳のとき、

野心を持ってフランクフルトからこの国へ来ましたが、こんどは息子のため働かなければならないのだから……ああ、息子の名前は、カイゼル陛下にあやかつて、ヴィルヘルムとつけよう」

「ぼくの娘は、おふくろの名前をもらつてエレンとしよう」エド・サッチャーの眼に涙があふれた。

ザカーさんは立ち上がった。「ではさよなら、サッチャーさん。おかげさまで愉快でした。わたし娘たちのところへ帰らなければなりません」

サッチャーは太った手とまた握手した。そして、ふわつとしたいい気持で、母親や父親になることや、パースデー・ケーキや、クリスマス<sup>クリスマス</sup>のことなどを空想しながらセピア色の泡でできた霞<sup>かすみ</sup>のかたなに、ザカーさんが両開き戸を通してまたたた出てゆくのをじっと見つめていた。しばらくしてから彼は腕を伸ばして背伸びをした。かわいそうにスージーのやつ、おれがこんな所にいるのをよくは思うまい……スージーと、いとしかわいいちびちゃんのために、何でもやるぞ。

「もしお客さん、勘定はどうしたね？」彼が戸口まで来たとき、うしろからバーテンがどなった。

「もう一人の男が払わなかったかい？」

「とんでもねえ」

「だ、だって、おごるつて言つてたのに」

パーテンは受け取ったお金の上に赤い布巾をかけて笑った。「あの酔っぱらいじい、貯めるほうに宗旨がえしたんだろ」

顎ひげを生やし、山高帽をかぶった、小柄な、がにまたの男がアラン通りを歩いてた。日光が縞になって射している高架線のガードの下には、空色や、煙製鮭色や、辛子色からしのふとんが干してあり、しょうがペン色の中古の家具があちこちに放り出してあった。彼は冷たい手をフロックコートの尻尾の上に組みあわせ、荷造りの箱や、走り回る子供たちをよけて歩いていった。たえず唇を噛んだり、手を握ったり開いたりしていた。子供たちのわめき声にも、頭上を走る高架鉄道の耳を聳うする轟音ごうおんにも無頓着で、ひしめきあっている貧乏長屋の発散する、むっと甘ずっぱい、ごたまぜのにおいにも気がつかないで歩いていた。

カナル通りの角にある、黄色いペンキを塗ったドラッグストアまで来ると、彼は立ち止まって、緑色の広告板の顔をぼんやり見つめた。それは額の広い、きれいに剃ったりっぱな顔で、弓なりの眉毛と、ふさふさした、きちんと刈りそろえた口ひげをしていた。それは銀行に金を持っている人の顔で、ぱりとした折れカラーと、たっぷりした黒ネクタイの上に金持らしくおさまっている

顔だった。その下には英習字帳式の筆記体でキング・C・ジレットと署名がしてあった。頭の上には『革砥かわとも不要、砥石も不要』という標語が書いてあった。小柄な顎ひげの男は、汗ばむ顔の山高帽をうしろへ押しやって、キング・C・ジレットの、金を自慢しているような眼を長いこと見つめていた。それからこぶしをぎゅっと握り、両肩をぐっと張って、ドラッグストアの中へ入っていった。

彼の妻と娘たちは外出していた。彼は水さしをガスこんろの上にのせて暖めた。それからマントルピースの上に見つけた鋏はさみで、その長い褐色の顎ひげを切り取った。次に、新しいニッケルが光る安全剃刀で、非常にいい顔をあたりはじめた。彼はしみだらけの鏡の前に立って、すべすべの白い頬を指でなでおろしながら、体を震わせた。さらに口ひげを刈りそろえているときに、うしろに物音が聞こえた。彼はそちらのほうに、キング・C・ジレットのようにすべすべな顔、金の光でにこやかに笑っているような顔を向けた。二人の少女の頭から目玉がとび出したように見えた。

「母ちゃん……父ちゃんだよ」と大きなほうが叫んだ。彼の妻は揺り椅子の中に、洗濯物を入れた袋のようにどさりと坐りこんで、エプロンを頭にぱっとかぶった。

「あーあ、あーあ」と彼女は椅子を前後にゆすぶりなが